哲學會役員（五十音順）

會長

小石川區表町一〇九　文學博士　井上哲次郎

評議員

小石川區白山御殿町一一七　文學博士　姉崎正治
本郷區駒込富士前町五三　文學博士　井上圓了
本郷區駒込西片町一〇、ろ一一號　文學博士　大塚保治
本郷區駒込千駄木町五〇　文學士　大島正德
本郷區駒込千駄木町五七　文學士　紀平正美
牛込區北町三四　文學博士　桑木嚴翼
豐多摩郡千駄ヶ谷町九〇二　文學博士　高楠順次郎
豐多摩郡代々幡村大字代々木一八五　文學博士　中島力造（會計監督）
豐多摩郡戸塚町字諏訪二四五　文學博士　服部宇之吉
赤坂區新坂町八二　文學博士　三宅雄二郎
小石川區林町三一　文學博士　村上專精
豐多摩郡千駄ヶ谷町九〇二　文學士　吉田靜致
小石川區白山御殿町一一〇　文學博士　吉田熊次

編輯委員

本郷區駒込千駄木町四二　文學士　伊藤吉之助（主任）
本郷區駒込蓬萊町一、浩妙寺　文學士　四宮象之

庶務委員

小石川區林町六三　第二眞心寮　文學士　鈴木弘

書記

文科大學事務室內　清島重德（小石川區水道町三九）

東京帝國大學文科大學哲學研究室內

哲學雜誌

第參拾參卷

第三百七十三號

大正七年三月一日發行

□否定の研究……文學士　今區　恩
□幾何學の論理的基礎（完）……文學士　田邊　元
□三階教の普法に就いて……文學士　矢吹慶輝
□スコラ哲學に就いて……文學士　征矢野晃雄
□最近の佛國哲學界……文學士　出　隆
□學界彙報……
□寄贈書籍及雜誌紹介……
□最近內外哲學界……

哲學會編輯

三階教の普法に就いて(承前)

矢吹慶輝

三　如來藏佛

三階教は第三階の歸依佛を擧げて五種(眞應二佛、形像佛、邪魔佛、普眞普正佛)となし就中第五普眞普正佛の思想が普法佛教の特色たるは前既に之をいへり。而して普眞普正佛に四種あり此四種は如何なる根據(經文の外教理的證據)に據りしか。四種は嚴密に區別せらるべきか。

如來藏佛と佛性佛とは如何に異るか。抑も此四種普佛の名義如何。是等の疑問に對して第一斷片は曾て一語の之に言及するなく唯だ經證を列擧せるに過きず。宰に第五斷片は僅に三紙に過きざるも具葉古式の體裁に成れる寫本として珍重すべきが上に四佛に關する稍詳細の說明を保存せり。三階教に關する論辯は須らく三階教斷片をして答へしめよ。先づ如來藏佛とは何ぞ。

(斷片首部缺)……別不同亦一亦異、非一非異離諸執着、然法界眞作法界妄妄依眞故、

然眞不獨立常依妄故、妄不孤起必依眞故。又如來藏與一切生死體相常同、如金與莊嚴具體相常同。又如來藏與法界名相體相常別、如微塵與燥濕常別。然非異非不異。「經言若於无量煩惱藏所纏如來藏不疑惑者。於出无量煩惱藏法身亦无疑惑。」(1)又勝鬘經說生死依如來藏、以如來藏故說本際不可知、始(衍字歟)以有如來藏故說生死是名善說、世間言說故有生死非如來藏有生死(2)如來藏者是法界藏是法身藏出世間上々藏自性淸淨藏、(3)唯一寂滅是眞究竟、恒離一切妄想顚倒而法界妄依法界眞實住、言法界名相依如來藏住如一切波依於水故、由有如來藏故有法界名相、如由有水有一切波。然如來藏有生死相、生者新名相起、死者舊名相滅、如水與波同起同滅、然水无起亦復无滅、波相依水有起有滅、新波起時舊波滅故其法界名相卽是如來藏體相外无別體故、如一切波卽是其水波外无水故。但法界名相由一切善惡業生不由如來藏起、如一切波正由風生不由水起。又如來藏功德作用亘周法界與一切名相作依持建立本(4)如一切水功能體用遍一切波與一切波作依處故、然如來藏異於一切名相唯藏是體、名相非體故如水體異一切波、唯水是水波非水故。又如來藏體性眞實於一切名相作而不作、如水體澄淸於一切波作而不作故亦名阿賴耶識、故密嚴經下卷云佛說如來藏以爲阿賴耶惡惠不能知藏卽賴耶識。

此就理心二本說藏卽理世識卽心也。藏爲眞也識爲俗也(9)又亦名无作四聖諦(5)苦集雖滅滅无所滅、滅道雖證證无所證、由无滅无證故常无增減。「亦名一諦」(6)無滅無證究意眞實故。「亦名一依」(7)法界解行最勝依故。亦名如々平等无二故。亦名法界不增不減故。亦名藏識蘊積諸法故。此如來藏約緣就相无始无終眞妄相依不離不脫故楞伽經云譬如巨海浪、斯由猛風起洪波故名鼓冥壑、无有斷絕時、藏識海常住境界風所動、種々諸識浪、騰躍而轉生」或翻眞以成妄、如伎兒伎量、或覆妄以成眞、如金莊嚴具、正因緣因同異乳酪醍醐眞與(與?)妄長所由、如海水波浪。一乘三乘同別(10)「如阿耨池與八河、種々因緣譬喩具如經說」(8)言如來藏約緣就用能長因成果變小成大轉凡成聖總是如來藏佛之功力也。(本文中の括弧、批點、歐數字は且らく便宜上筆者の挿入)

引用文の出據を縮刷藏經中に探るに下の如し

(1)勝鬘經法身章(地十二の五七右)、(5)同上(地十二の五七左)、(2)(3)(4)同上自性淸淨章(地十二の五八右)、(6)(7)同上一諦章一依章(地十二の五七左)、(8)同上一乘章(地十二の五五左)。(8)

(9)密嚴經阿賴耶微密品(黃八の四六右)。

(10)四卷楞伽經一切佛語心品一之一(黃六の五右)等。

此に如來藏佛に關して比較的長文を引用せるは一は現時三階敎藉散逸して傳はらざるが故に聊か參照の便に供せんが爲なるも他に重要の理由あるに由る。惟ふに如來藏の三字は佛敎性(實大乘)相(權大乘)兩宗に於ける論議の燒點たりしものなれば三階敎は如何に之を取扱へるかを看んとの主意に出つ。

斷片如來藏佛を主張せる大要を見るに法界眞(本體卽ち如)妄(現象卽ち衆生)の關係を述へて眞、妄を作り妄、眞に依り互に獨立せずとなし次に生死名相(妄)と如來藏(眞妄和合)と體相同別兩面あるを說き勝鬘經を引きて在纏(妄)如來藏と出纏(眞)如來藏(法身)との融卽を說き法界を總核するが故に法界藏となし法界眞法を生する邊より法身藏、出世間上々藏、自性淸淨藏の異名を列し眞妄相關は畢竟水波不一不異なりと雖とも元と如來藏の功德作用亘に法界に周遍し一切名相の依持建立の本源たるが故に密嚴經には如來藏を阿賴耶となすを引說し勝鬘經の無作の四諦、一諦、一依亦此外に出でざるを說き、如々といひ法界といひ藏識といふ此別名に過ぎざるを述べ終りに楞伽經を引いて藏識海(阿梨耶識)卽ち如來藏界中識浪動搖あるを水波不二に歸するの文證を擧げ如來藏中眞妄和合せりと雖も約緣就用(發心修行)能く其眞門に從つて

得道成聖を可能ならしむといふもの此一節の大要となす。一言にして盡さば迷悟畢竟如來藏に出つといふに在り。

第一斷片は如來藏佛を主張する經證として楞伽、勝鬘、涅槃を擧げ第五斷片は更に密嚴を引用せり。而して以上の四經共に如來藏を說けり。就中(一)楞伽經は元魏菩提流志、劉宋求那跋陀羅、唐實叉難陀の三譯ありて魏宋の四卷及び十卷楞伽は年代上三階師が必ず依用せしものと推定せらる。是より少しく前達磨大師も此經(四卷)を指して以て印心とせしと傳ふ(楞伽經蘇軾序)。一切佛語心品中一切法不生の故に宗を立つべからず(宗通相、黃六の一七)とせるは不立文字の意義あると共に普法の敎義に呼應するものあり。特に如來藏を詳說して外道所說の我に同じからずとなし(佛語心品の二黃六の九以下)又生滅の問に答へて如來藏は善不善の因なるを明し如來藏を識藏と名く等といへり(佛語心品の三の終り)。

楞伽の經意如來藏を說くに頗る便なるものなり。引用文は宋譯四卷楞伽經佛語心品第一之一の偈文(黃六の五右)より初八句を取りしものにて魏譯十卷楞伽は藏識海常住を梨耶識亦爾といふの外同文なり。此他下の金と金具(黃六の一八左)海水と波浪(黃六の四左等)三乘一乘同別(黃六の二八)の如き亦同經の說意によれりとも見ら

るべし。

(二)密嚴經は現存地婆訶羅及不空の二唐譯あり現存初譯の譯人地婆訶羅は高宗儀鳳元年(西紀六七六)の入唐にて中宗嗣聖四年(西紀六八七)の寂なるが故に本經を引用せる第五斷片は勿論信行の沒年を距る八九十年の後に出でしを知る。即ち三階敎興起當時の譯經に非ず。抑も三階集錄其他も前に辨ぜるが如く信行の弟子斐玄證等の筆錄にて三階敎藉は定題なく間々後人の加筆ありしと想像すべき理由ありて本篇の題目に特に三階敎として信行に局らざりし以上唐譯密嚴經を引用するも不倫なりと言ふべからず。地婆訶羅譯三卷密嚴經には密嚴會品第一中、金剛藏菩薩第一義法性を問へるによりて如來藏不生不滅、月の普く現するが如くなるを以て答ふ(黃八の二九左)又妙身生品第二には世間一切誰の所作なりやとの問に對し阿賴耶識能く衆法を現するを以て答とせり。本經第六品阿賴耶建立品以下第八品阿賴耶微密品に至るまで阿賴耶說を叙する事極めて詳密なり。阿賴耶說と外道說、賴耶と七識、賴耶と首楞嚴定等の諸關係を叙し第八品には特に阿賴耶識迷悟の緣に隨て凡となり聖となるを說いて唯識の妙義を明かし阿賴耶識と如來藏と畢竟不一不異の義を立てゝ一經の終尾となせり。本引文は此經末偈文中より四句を取れるなり(黃八

の四六右)。

(三)勝鬘經は劉宋求耶跋陀羅譯にして全篇十五章より成り各章皆大乘の圓義を叙し古來の章疏家により最も多く引用せられし經典の一となす。特に其如來藏義は既に天親造眞諦譯の佛性論(第二に五種の如來藏を擧ぐに當り)並に後魏勒耶摩提譯の究竟一乘寶性論(第四に如來藏が五藏義を具して諸法の依止たるを說くに當り)中に引用せられしに見れば單り支那に於ける流行とのみ見るべきに非ず、叙述を約せんが爲に引文中に括弧を附して勝鬘經よりの引文或は語句を判明にせり。即ち同經の如來藏章は勿論一依章一諦章等に及べり。蓋し三階敎は經藏を主として論藏を主とせざりしが故に叙述に論文を引かず專ら經文を引いて所立の義を說明せるが故に便宜に從ひ諸經より引用せしが最も多く勝鬘經によりて說けり、第五斷片は密嚴經を引用せるによりて唐初以後の製作と斷定すべきも三階敎普佛の隨一たる如來藏佛は是より前主として勝鬘と楞伽とによりて立說せられし者と推定せらる。

以上如來藏佛說の根據たる勝鬘楞伽密嚴三經中の如來藏義を摘記せしが如來藏說は單り前三經の主張に非ず、如來藏佛の根本義は畢竟如東藏緣起說に同じ而して如來藏緣起は一に眞如緣起といひ大乘諸經論中通貫の一論題たり。此故に覺賢譯

の如來藏經(九喩を擧けて一切衆生皆如來藏性あるを說く)提雲般若譯如來藏論(法界無差別論の異名)の如く經論に如來藏を其首題となすあり、彼の堅慧の寶性論、馬鳴の起信論の如きは本論題に關して最も世に知らる。但し三階師は好んで經典に確證を求め此に三經を引用せるが此三經は如來藏緣起の說をなせる好代表經典として後代其說をなすもの其文證中必ず引用を怠らざりし經典たりき。

如來藏說は斯く多數の經論に散見す、抑も如來藏とは何ぞ。曰く一多の關係を一に於て見たるなり之を本體論よりすれば眞如(一)の方法(多)中にあるをいひ之を佛陀論よりすれば如來(一)の衆生(多)中にあるをいふ即ち客觀の法たる眞如と主觀の人たる衆生との對立に於て萬法(差別)の根基は悉く眞如(平等)たるが故に衆生位中の眞如を考ふる時其眞如は眞如(淨)たるべくして然かも衆生(染)中にあるが故に染淨和合眞妄和合の眞如にてあるなり(賢首起信論義記に和合不和合の二門は衆生位に就ていひ佛地には和合の義なしと)。染と淨、迷と悟、差別と平等凡ての對立原理中に介在する限りそれ自體の平等相として表はされざるが故に和合の上よりは染法を開展し不和合の上よりは淨法を開展するなり。淨となり染となる悉く眞如に攝せられ如來の性に含まるゝなり、即ち如來(眞如)が一切法を攝盡するの義にて如來藏といふ。

第五斷片如來藏佛の解釋中、眞と妄、如來藏と生死、如來藏と名相との關係を說いて非一非異となし亦一亦異となし常同常別と換言せるもの畢竟此意義を出でざるなり。

由來平等卽差別論に在りては多卽一の論脈は同時に一卽多の推理を認容す。既に眞如萬法を攝し如來衆生を藏するは同時に萬法は眞如の中に如來は衆生の中にあるが故に如來の淨が衆生の染中に藏せられ染法の隱覆を受けて如來淨性の顯現を妨ぐ卽ち在纏の如來を如來藏とも解すべし。引用文中勝鬘經を引き(1)の引文)无量煩惱藏所纏如來藏といへるもの是なり。信行と同時の吉藏は貴鬘寶窟下本に勝鬘經の無量煩惱藏を解し又此惑能藏如來法身故名爲藏となし又此關係を三面(下の佛性論の三義に就て)より見て一面には「一切衆生無有出如々境者、幷爲如々所攝故名藏也、則衆生爲如來所攝也」となし他面よりは「如來性住在道前、爲煩惱隱覆、衆生不見故名爲藏」となし、前是如來藏衆生後是衆生藏如來」といへり(續藏三十套一の三の二五一)。天親造陳眞諦譯佛性論如來藏品には所攝、隱覆、能攝の三義を以て如來藏を解せり、所攝の義とは染淨諸法悉く眞如に攝せらるゝを意味し隱覆の義とは在纏の如來が染法の爲に其性德を隱覆せらるゝをいひ能攝の義とは因地(凡夫)在纏眞如も亦能く果地(佛)の功德を含攝するを意味す(論顯體分中如來藏品第三暑二の八一)三

義畢竟佛凡一如の根本を或は衆生(染、因)より或は佛果(淨、果)より觀たるに過ぎず此他空不空の二如來藏、隱覆、含攝、出生の三如來藏等唯用語を異にするのみ。起信論の所說亦如上の義意を出でず。特に本斷片が水波非一非二の引例は起信論の所說に同じ本斷片が楞伽經を引いて起信論を引かざるも起信論は元と楞伽經を豫想しての製作なりとの一語を附せんか他は多くを贅するの要なかるべし(淨影慧遠起信論疏智旭の裂網疏等參照)

斷片本文中如來藏佛を解するに最も多く引用せられしは勝鬘經にして本經は如來藏緣起說を知るに於て比較的簡にして要を得たるものゝ一たり、而して信行(西紀五四一——五九四)と同時の淨影慧遠(五四九——五九二)に勝鬘經義記(下卷缺)あり前述起信論義記四卷と共に好參考たるべく又嘉祥吉藏(五四九——六二三)に勝鬘經寶窟六卷あり此他に慈恩窺基の述記の外、和漢の諸勝鬘經疏中に引用せられて今日僅に片麟を留むる古注、僧馥の注、勝鬘、梁林法師の一卷疏、及び無名疏の外現存最古の勝鬘疏たる北魏正始元年筆傷の勝鬘藏記あり(此等の逸典の解說に就きては宗教界第十三卷第四號以下に揭載せる拙稿「北魏正始四年筆寫燉煌出勝鬘經義記に就いて」を參照せらるべし)是等併せて隋末唐初に於ける三階師の勝鬘解釋に好參考資料たるべし。

以上三階教の如來藏佛の何物たるかを略叙せるが故に今斷行本文の細釋を略し唯だ斷片中密嚴經を引いて阿賴耶と如來藏とを同視するの主張に就て一言するに止めん。蓋、古來性相兩家の阿賴耶を論ずるに當つて其代表的異論に少くとも地論、攝論、華嚴、唯識の四家あり、三階師の如來藏佛は其何れとすべきか。

阿賴耶 Ālaya 又阿梨耶と音譯せられ舊譯は无沒とし新譯は藏と意譯せり、而して賴耶の說阿含を含みて性相兩案の所談たり。楞伽經起信論に阿梨耶となし唯識論に阿賴耶とせるは音譯の相違のみ。

先づ元魏菩提留支譯十卷楞伽經第七卷佛性品第十一に「如來之藏是善不善因故能與六道作生死因緣、譬如伎兒出種々伎、衆生依於如來藏故五道生死……阿梨耶識者名如來藏而與無明七識共俱如大海波常不斷絕云々」(黃六の六二右)とあり、茲に七識(波)は無明にて阿梨耶第八(海)は眞妄和合に名けしなり、尙宋譯四卷楞伽(第四、黃六の二五)と併せて參照すべし。然るに起信論には「心生滅者依如來藏故有生滅心、所謂不生不滅與生滅和合非一非異名爲阿梨耶識」といへり、嚴密に文意を考ふるに如來藏を直に阿賴耶識といふべきに非ず卽ち阿賴耶は如來藏が生滅の無明と和合せし場合に名けしものと見るべし、果して然らば如來藏とは賴耶中の不生不滅卽ち眞如に

名けしものなれば寧ろ動中の靜に名けしものとす。固より如來藏は眞妄の中介原理なるが故に眞妄何れか對應を異にするに從つて動とも靜とも見らるべきは論なし。唯た楞伽と起信との文に就て少異あるを指摘せるに過ぎず。賢首の起信論義記に如來藏心を二面より見て平等相として一味無差別なる眞如門よりせる約體絕相の義と差別相として隨熏轉動する生滅門よりせる隨緣起滅の義ありとなし特に同上楞伽經文を第二隨緣起滅の下に引用せるは如來藏は如何なる意義にて阿賴耶識なるかを說くに亦多少の相違あるを示すものと見らるべし。要之楞伽起信は第八賴耶を眞妄和合と見做し一心中に生滅と不生滅との二義を含めりとなすが故に又如來藏と同一視せらるゝなり。

惟ふに隋唐の間、阿賴耶眞妄和合不和合の論議をなせるものゝ中地論宗と唯識宗とは前者は唯眞、後者は唯妄となし互に正反對の主張をなせり。地論宗(世親)の十地論(華嚴經第六會十地品の釋論)より出て梁代光統以下の諸師によつて盛んに講說せられ中唐華嚴宗の勃興頃まで繼續せり)にては阿梨耶識は淸淨無垢の眞識となし眞如と同一と見たり信行と同時の天台智顗は地人は阿梨耶を眞常の淨識となすと傳ふ(法華玄義第五下)。實に攝論宗(梁の眞諦譯無着の攝大乘論及世親の釋論により眞

諦以下師資相承けて陳隋の間盛に講說せらる後ち玄奘亦無着の本論幷に世親無性の二釋論を譯し大に前論に異り玄奘の宗旨たる唯識論の義に同ずるものあり遂に梁論も所依とせる攝論宗は唯識法相宗出づるに及んで其跡を絕てり)は或は阿賴耶を生滅の妄識と見或は眞妄和合識となす。智顗は攝大乘人は阿梨耶を無記無明隨眠の識とし第九識を立てゝ之を淨識と名くといふ(同上)。斯くして攝論は或は起信、楞伽の如く和合の義に同じ或は阿賴耶を妄識となすに唯識宗(支那にては唐玄奘慈恩に起る)は第八賴耶は唯だ是れ生滅となし不生滅の義を認めず唯妄非眞となす。

蓋、若阿賴耶にして不生滅なりとせば前七識(生滅)と關係し其所熏たるべからずといふに在り、卽ち七識の所熏によりて萬法現起を說くこと彼此異らざるも所熏所たる第八が不生滅の義あるか否かに於て性相兩宗の相違を致す。性宗の通義によれば第八阿賴耶は輙ち如來藏の隨緣なれば生滅不生滅の二義を有すとなし相宗は之に反して阿賴耶が不生滅なりとせば七識の所熏たるを得べからずとなす。之を約言すれば眞如隨緣か眞如凝然かの二義に歸し兩端の論議畢竟本體と現象との關係論にして眞妄和合の義最も能く一卽多の說明に便なりとす。以上四家の所說は一部の所傳に依據せしものにて唯識宗が阿賴耶も唯妄となすの義は每に確定せるも攝

論宗地論宗の所說に就きては上述の外異義なきに非ず。攝論に梁論(第九識を立て)新論(唯第八)全く所說を異にするが如く地論家亦北道南道互に主張を異にし梨耶眞如何れが依持なるかの論議あり、今是が詳說を略するも所論は畢に阿賴耶眞妄和合とするか、唯眞とするか、將た唯妄とするかの三點に歸し三階敎の如來藏佛は阿賴耶眞妄和合の義に立ち阿賴耶卽ち如來藏と見たるなり。

惟ふに原始佛敎以來の業感緣起說は俱舍論等に至りて色心諸法(物心諸元各個の實有を認めて其實體の恆有を主張し唯識論の阿賴耶緣起にては一切萬有悉く第八阿賴耶の種子(諸法を生起すべき勢用)所生にして本有新薰(先天經驗)の關係によりて能く萬差の諸法を現起すとなし業力の根柢を賴耶に求め唯心說を强めしが尙各人の阿賴邪は無始以來各人阿賴耶として相續し各人の阿賴耶より各人獨特の世界を生起す(但し各人は人類として共業所感なるが故に彼此の世界を同一の如く見做す)となすは未だ徹底せざる點あるが如し。茲に眞如緣起說は絕待全一の眞如を見眞如の一元より萬象を生ぜりとなす。彼の業感緣起は直に多元論にして賴耶緣起は動もすれば多心論たらんとし餘りに多(相對差別)を重んじたるに對し眞如緣起は一理隨緣の一(絕待平等)に立てりと見らるべし。前者は多如何にして一なるを得るか

の說明に苦しみ後者は一如何にして多なるを得るかの解釋に惱む。三階敎が如來藏佛を點出し賴耶卽如來藏說をなすは元と眞如緣起に立脚せるが故に一如何にして多なるかを說明せざるべからず、恰も好し眞妄和合の如來藏說阿賴耶論あり藉て以て第三階普佛を說くの資料となせしもの卽ち第五斷片如來藏佛の一節なりとす。三階師は賴耶說につきては唯眞、唯妄兩つながら之を取らず如來藏卽賴耶說を取り楞伽蜜密嚴を正依とし所說起信攝論に接近し又賢首の立義に類同すといふべし。但し華嚴と三階敎との關係に就ては別論に讓る。

四　佛性佛

第五斷片中の佛性佛に關する全文を擧げん、

第二佛性佛者或有理性或有行性或有因性或有果性。今此明者唯依涅槃經第三十八卷說但明正因佛性。言一切法界衆生通凡及聖皆有此性一切諸佛菩薩亦同有此性從極果立名故名佛性。然此佛性非因非果在因名因在果名果共前如來藏眼目異名約緣義少有差別。佛性義者與法界常果收法界常因故名佛性從佛果向因總收盡故名佛性佛。准涅槃經云第三十六卷說佛性者不名一法十法百法千法萬法乃至未得阿耨多羅三藐三菩提以來一切善惡無記悉名佛性。佛性具四種得所謂眞常眞樂眞戒眞淨常恒不變故清凉無惱故眞實自在故煩惱不染故、隨緣轉變不染而染、若在凡夫身卽雜煩惱如雜血乳性聲聞如乳緣覺如酪菩薩之人如生熟蘇諸佛如來猶如醍醐言凡聖大小行位雖殊就正回之性一而無二卽自性住佛性、性无自性卽空是有卽有是空、不斷不常非一非異離能取所取絕四句八非故。涅槃經第二十八卷師子吼菩薩問以何義故名爲佛性佛、答云一切諸佛阿耨菩提中道種子名爲佛性。又經云佛性者名第一義空、第一義空者名爲智惠、所言空者不見空與不空、智者見空及與不空、空者謂一切生死、不空者謂大涅槃、見一切空不見不空不名中道我無戒等亦復如是。言中道者名爲佛性以是義故佛性常恒无有變易故涅槃經云聲聞緣覺唯見於空不見不空不名中道。亦名第一義諦常住不變故、亦名第一義空離諸名相故亦名智慧、亦名光明離諸愚闇故、不可捉持不可繫縛而亦可見、若有說言不可見者如是之人所不應依、亦名金剛三昧不可阻壞故、亦名涅槃不生不滅故、亦名爲佛性覺了故、亦名爲法性軌持故、亦名爲僧理无違故、經云是人雖信佛法僧寶不信三寶同一性相、是則名爲信不具、又亦名眞空非兎角故、亦名妙有異虛空故、又花嚴經名无相无碍智慧在於衆生身中故、亦名心眞如門本來無變故、亦名不生不滅色心眞緣眞相性常住故、亦名自性往佛性本覺之性非緣起故、亦名自

性涅槃本來寂淨故、亦名自性波若自性清淨離无明故、亦名實際性體眞實不虛假故、亦名眞如契理之性无變異故、非陰界入不離陰界入非衆生不離衆生非常非无常常無常具足故、亦名微妙藥王能除衆生煩惱病故、亦名衆生寶藏故、涅槃經云譬如長者於飢饉世財難得時乃出寶藏而共用之、諸佛亦尒於娑婆世界像法之中衆生顚倒自法盡時五無間業極惡增長耶邪見競興二十種顚倒衆生處々充滿、如此嶮法之時乃出此佛法寶藏而共用之所謂正因佛性、言一切法界衆生通凡及聖皆有此性、唯除草木墻壁瓦礫、此對非佛性說有佛性故、經文道非佛性者謂土木几石離此無情之物悉名佛性、但以无明所覆不能得見金欲見者須以人空法空遣人我法我定惠平等寂照分明理事俱融染淨體相將心從境廢己同他、聞其不開見其不見即可見也

本節中華嚴經(卅六性起品)よりの引用文の外は殆と皆涅槃經文を引用し就中取意文多し。識譯涅槃經中に關係文を探るに第三十八卷正因佛性云云は加葉菩薩品(第十二之六、盈六の八三)生了二因の文を指すか或は第三十八卷は第二十八卷の誤にて師子吼菩薩品(第十一之二、盈六の三六)因有二種一者正因二者緣因、正因者如乳生酪緣因有如醍醐等……正因者謂諸衆生緣因者謂六波密の文に當

るが。第三十六卷は加葉菩薩品十二之四(盈六の七七)にて乳酪等五味の配當は第三十五卷加葉菩薩品第十二の三(盈六の七〇右)の文によれり。次に涅槃經第二十八卷師子吼菩薩との問答に於ける「一切諸佛……中道種子」の文は師子吼菩薩品第十一の一(盈六の三〇左)に出つ。此他第一義空(涅槃北本廿七)中道(卅五、卅七等の諸異名は涅槃經各所に敎說せらる、但し本引文中偶々他經論の語句を轉用せしもの無きに非ず。

佛性とは佛たるべき性を指し一切衆生皆覺者たるべき性(不改の義)あるをいふ(慧遠大乘義章一に性に1種子因本2體3不改4性別の四義を附せり)。而して佛性も如來藏も其根本義に於ては同一たり故に大乘止觀法門(陳慧思說)には「垢藏之中佛性滿足是名如來藏也」といひ如來方廣大乘經には「一切衆生身皆有佛性、具如來藏、一切衆生无上菩提器」といひ(阿婆縛抄第三、全書二八九の引文に據る)佛性說を叙せるによりて廣く世に知らるる佛性論二には五如來藏(如來藏、正法藏、法身藏、出世藏、自性淸淨藏)を叙し又究意一乘寶性論にては「一切衆生界、不離諸佛智、以彼淨無垢、性體不二」故、依一切諸佛、平等法性身、知一切衆生皆有如來藏」といへり。是れ平等法性は生佛に通し法性法の普遍は佛性(人)の普遍を示し佛性普遍なるが故に一切

衆生如來藏を有すとの文意なり。本文に「此佛性は如來藏と眼目の異名と」なせるもの其根本教理に於て如來藏佛と同じきを知るべし、唯た「約緣義少有差別」のみ。

原始佛教を見るに僧中有佛は忽にして生(衆生)中有佛となり大乘教は又小乘教の佛性を說くの偏狹を難して起てり。然も大乘教中三乘說にては佛性普遍を拒む傾向あり唯だ一乘說は悉く一性皆成を主張す。法相宗は定性、不定性、无性を說き定性中に聲聞緣覺菩薩あるか故に之に定性と无性とを加へて五性名別の說をなし涅槃經等に悉有佛性と說くは不定性を警策するの語となし定性の二乘と无性とは成佛の緣なしとなし性宗は一切衆生本來佛種を缺くものあることなしとなす。本文首部の理行二佛性は主として法相宗の用語にして理佛性とは法性の妙理にして一切有情悉く之を具有し行佛性は大圓鏡智等四智の種子にして衆生によりて不定となす、所謂悉有佛性は理佛性をいふものにて行佛性としては少分の一切を含むに過ぎすとす。されど一切有情悉く法性の妙理を具有すとせば何故に無を開顯しえざるものあるか、是が答案は事實然りといふに歸し事實の然るは法爾自然の道理なりといふ。此際法爾自然の道理は何故に斯る事實を現出するかと問ふは問題を循環論に導くものたり。されど其反對たる一性皆成にも疑論なきに非ず、一切衆生は成佛

すべしとして現に迷へる衆生あり人によりて成佛に遲速ありとすればそは何に起因するか。理想上皆成は必然なりとして是が實現には偶然を免れず。過去に若干の佛陀ありて既に成佛せりとすれば是と同時の他の衆生は何故に其若干の諸佛の如く成佛し得ざりしか。成すべきもの(勢)は必ずしも成せるもの(現勢)に非ずとせば無作本有を論ぜざる限り(極端は宗教無用論となり惡無過となる)五性各別を說いて各別は必然なるも五性は偶然なりとして成不に必然偶然を併說するの說亦理なきに非ずと謂ふべし(緒言、教理史上の觀察參照)如來藏佛といひ佛性佛といふ等しく一多偶然必然の論題を出でず。

三階教の普佛は既に上節如來藏佛の下に於て明かなりしが如く一性皆成を主義とせるや論なし。既に一性皆成の宗旨なりとせば衆生皆覺性を具有すとなす、然らば佛たり得て初めて佛たるを知るを要せず佛たらずして然かも佛たるべきなり。涅槃經には因と果、卽ち潛在と現在とに亙る佛性を生因了因の二となし或は正因緣因となす。就中三因佛性の說涅槃天台兩家の採釋を待つて最も普通なる佛教術語をなしぬ。正因佛性とは一切の迷悟を離れたる(佛凡を差別せず)中正の眞如なり、是あるによりて法身の果德を成就するをいひ了因佛性とは正因眞如を照了する智慧

にして是あるによりて般若の果德を成就するをいひ緣因佛性とは了因を緣助し正因を開發せしむる一切の善行にして是あるによりて解脫の德を成就するをいふ。隋天台大師の金光明玄義には正因佛性を土內の金藏に了因佛性を草穢を耘除して金藏を堀出するに譬ふ。三因孤起せず互に相依るを以て宋知禮は緣資了、了顯正、正起勝緣(金光明玄記)といへり。

是に由りて本文首部の文を見るに佛性に理性行性あり因性果性あるも今此に所謂佛性佛は涅槃經によりての正因佛性を意味し迷悟にも凡聖にも通具の理性を指し唯だ佛果を得るの正因たるが故に其結果より命名して佛性といひ迷悟凡聖に通ぜる眞如の理なるが故に當體因果を離れて然かも了緣二因によりて覺性を開顯し佛果に到達す本文に「非因非果在因名因在果名果」といふもの是なり。既に佛性常住の正因佛性を取るが故に法界の常果と法界の常因を收盡すといふ。了緣二因の佛性に在りては具不不定なるが故に佛凡一如の眞相より見て一切衆生に悉く內在佛を認めて之を佛性佛となせり。

本文未得菩提の中間善惡無記三性悉く皆佛性ある所以、佛性常樂我淨の四德を具する所以、凡夫と四聖とにありて唯だ五味の差別(程度の差にして種類の差に非ず)ある所以、五味差別し行位前後あるも正因の性に就ては同一無差別なるが故に本然の性に於て前後の變化なし故に又自性住佛性となす所以等凡て上述より類推するを得べく同代の參考資料少からざるも特に信行の先輩たりし慧遠の大乘義章一、佛性義五門分別を參照すべし。

抑も佛性に關する名數は生了二因佛性と理行の二佛性と正了緣の三因佛性と及び此三佛性に果佛性と果々佛性とを加へての五佛性との外、又自性住佛性、引出佛性、至得果佛性の三佛性あり。本文に自性住佛性とは此最後の三因佛性の一にして眞如の理、自性常住にして變改あることなく衆生皆此性を具するをいふ。卽ち前の三因佛性中の正因佛性に當れり。本文中華嚴經涅槃經等によりて或は無相となし心眞如となし其他自性住佛性、自性、自性波若(般若)、眞如、微妙藥王、寶藏等と稱する皆正因佛性の換名に過ぎず。要之、佛性佛とは涅槃經の一切衆生悉有佛性の說に基き佛性の普遍を以て一切衆生を佛性上より佛と觀る三階敎の普佛を指せるなり。

但し本文終りに佛性は草木瓦礫に存せず此等無情物を離れて皆佛性ありとなすは元と涅槃の經說に基けるものなりと雖ども中道佛性は一切に遍滿し色香皆中道を具して有情と無情と依正只一大覺なりとすれば中道種子たる佛性が何故に草木

等の非情に拒まるべきか。既に人法の相卽を說かば法より見たる法性は普遍を說きながら人より見たる佛性が何故に草木瓦礫の非情に之を認めざるか。

惟ふに此論題は華嚴天台兩家の爭點にして中唐以後遙に我國近代の學匠に及べり。唐建中三年(七八二)七十二にて歿せる天台第六祖荊溪湛然は止觀弘決一の二に十義を以て又金錍を著して專ら十界十如依正不二の理によつて無情佛性を談じて暗に華嚴の澄觀(七三七——八三八賢首を距る百餘年)を難ず。蓋天台家にては色香卽中道、中道卽佛性の理に據りて非情成佛の義を立て彼の性具性惡の義と共に華天兩家の差異を示す根本論點たり。爾來草木國土悉皆成佛の語久しく人口に膾炙せり。但し此文は(一佛成道觀見法界艸木國土悉皆成佛)或は中陰經說とし或は佛說處胎經說となすも現存中陰經處胎經中に明文なしといふ。さはれ天台は法華經の諸法實相(情非情)涅槃の佛性(有情)を經證とし色香中道依正不二の理證によりて非情成佛の極談をなす。然るに華嚴家は眞如隨緣を有情に見たるを佛性とし無情に認むるを無性となし法を不覺に名け無情法に成佛を拒む。蓋、實修實行を首とせる佛敎は絕待唯心說の理によりて成佛を人に認むると共に又之を宇宙に認むべきも發足點に於て既に人の開悟を目的とせるが故に敢て非情成佛を唱ふの要なかりしものか。

彼の華天兩家の相違の如きは元と性具と性起(實相と緣起)との立脚地の相違に由來す。若し夫れ法性普遍より推論せば非情も成道の義なきに非ず、一佛成道して佛地より法界を觀見しなば艸木國土も亦成道の姿たるべきは理の當然とす、但しそは理成にして事成に非ず、天台家は一歩を進めて非情佛性の實成を談じて事理不二を到るべき點迄徹底せしむる所、他の何れの宗義とも異る一特色となす。一多偶然必然の論題は斯くの如くにして佛敎敎學の綱目をなす更に緖言を參照すべし。第五斷片が第七世紀末に譯出せられし密嚴經を引用せるも本經譯出後幾年にして筆錄せられしかを詳にせず、今第八世紀末に起りし無情成佛論を參照せるは或は遲きに失する嫌なきに非るも佛性論を推求しなば論點は畢に此處に到着せざるを得ず、況んや天台六祖以下無情成佛を談ずるもの之を經論に辿り之を天台大師の遺著に探るを思へば本斷片筆者が此論題に對する態度を知るの要あるべし。要之、第五斷片、佛性佛は諸經によりて一切皆成を主張し衆生悉く佛性佛たるを認めたるも無情も亦佛性佛となすに至らず此點に於て天台家よりも寧ろ華嚴家に近しといふべし。又彼涅槃宗は元と佛性常住を宗骨とし後ち天台の敎學に壓せられしも隋唐の間盛に流行したりしかば三階敎の佛性佛が直接關接に其影響を免れざりしならんか。抑

も佛性に關する論議は六朝以後資料に乏しからず、就中慧遠の大乘義章佛性義には法報應の三佛性、因、果、因果、非因非果の四性乃至三十三種佛性等の說あり、大乘義章は前述の如く信行の先輩慧遠の著述たるが上に本文解釋に豐富なる好資料たり。

五　當來佛　佛想佛

前の如來藏佛性佛は一切衆生の本體にして實に菩提の正因、法身の根本たり、此本性を具するもの法にありては一理隨緣、人にありては一性皆成たり。斯くして一切行悉く一乘普法の外に出づるものあることなきなり、換言せば一切衆生一人として當來成佛の潛勢を有せざるなきなり。故に第五斷片に曰く

體起成緣、約緣行々皆是如來藏行、皆是佛性行、以本攝苗以眞收妄皆是一乘普菩薩行、行滿足故、得成果佛以如來藏佛佛性佛在纏中故、在因位故、當來得作佛故名當來佛。

と。蓋し當來佛は如來藏佛佛性佛當然の歸結と謂ふべし。

惟ふに三階師が當來佛なる名目を別立せるは理論上佛性普遍の教理に基けるも其が直接の根據は文に

唯依法花經說不輕菩薩禮拜四衆、身中同有如來藏佛性、眞實體故云汝等皆行菩

薩道當得作佛故名當來佛

とあるによりて法華經第廿品常不輕菩薩品(本門の流通分)なるを知る、信行禪師は不輕菩薩の例に倣ひ途上に男女を禮拜せしとの傳は前に記せるが如し、惟ふに傳敎大師は「三佛性の像不輕の鏡に鑒み」といへるが如く由來本品中に三因佛性の義ありと謂ふ。佛性佛に次で當來佛を說けるもの所以なきに非ずと謂ふべし。蓋、常不輕菩薩が常に四衆を禮拜し、「我深敬汝等不敢輕慢所以者何汝等皆行菩薩道當得作佛」といへるは明に衆生の具性作佛を確言するものにて三階師は是に據りて當來佛の目を立て第三階の普佛を說きしなり

佛想佛とは第五斷片に曰く

佛想佛者由一切法界衆生同是如來藏佛性佛當來佛故相同眞佛名佛想佛

と。以て佛相佛の意義を知るべし。又立名の依憑を示して曰く

准花嚴經云第八卷明法品說等是衆生上下皆類皆如佛想、言衆生品類雖復不同若就體論俱是如來藏佛性佛當來佛故敬皆如佛想。又准依十輪經第四卷說敬一切无戒破戒及以持戒三種比丘作眞佛想、言持戒破戒雖復不同然如來卽佛性當來佛一

而无二故、故等敬之如眞佛想、故名佛想佛

と。一切衆生如來藏佛性よりすれば皆是れ當來佛たらざるなきなり。否當來作佛を俟つて初めて佛たるを知るべきに非ず。其體性よりせんか凡て是れ佛たらざるなし豈に修證得果の後のみを俟たんや。須らく有戒無戒持戒破戒の差別を徹して直に衆生に眞佛想を生ぜざるべからざるなり。惟ふに三階敎の普佛は此に至りて正に其煩點に達せしものといふべし。

抑も十輪經は現存二譯あり北凉失譯の大方廣十輪經八卷及玄奘譯の大乘大集地藏十輪經十卷是れなり。俱に地藏菩薩經にして三階敎と地藏敎とが密接なる關係ありて記すべきもの少からず、仍て十輪經佛想佛の思想と共に併せて別稿に讓り。唯茲には失譯大方廣十輪經は歷代三寶記が大乘修多羅失譯錄中に方廣十輪經七卷として之を列ね隋開皇頃に既に失譯經として流行し三階敎は其興起の當時より專ら依用せし經典の一なりしを附記するに止めん。

以上如來藏佛等の四佛は佛想佛たるは當來佛たるの豫想に基き當來佛たるは如來藏佛佛性佛たるによるが故に四佛畢竟普の一佛たり故に斷片に曰く

此四佛作一佛義、就八種佛法中、此四種佛是約體明竟

と。此に八種佛法とは維摩經に、所謂彼菩薩曰菩薩成就幾法、於此世界行無瘡疣、生于淨土、維摩詰言、菩薩成就八法、於此世界行無瘡疣、生于淨土、何等爲八、饒益衆生而不望報、(一)代一切衆生受諸苦惱、(二)所作功德盡以施之、等心衆生謙下無礙、(三)於諸菩薩視之如佛、(四)所未聞經聞之不疑、(五)不與聲聞而相違背、不嫉彼供、不高己利、而於其中調伏其心、(六)常省己過不訟彼短、(七)恒以一心求諸功德、(八)是爲八法、(什譯香積佛品、黃七の二六右)の文を指し、玄奘譯說無垢稱經には香臺佛品の經文に當り此處には第四法を「四者菩薩如是思惟我應於彼一切有情摧伏憍慢、敬愛如佛」(黃七の六三の左)といひて佛想佛の義意特に明了なりとす。維摩經は此八法を用つて淨土に往生するの因となせり。由是三階師は此經文によりて第三階師は須らく普正佛法たる八法によりて淨土に往生するを得べく別正佛法によりては其目的を達するを得ずとなす。惟ふに支那撰述中最も三階敎攻擊に力を致せるは懷感の釋淨土群疑論にして別佛たる阿彌陀佛を唯一歸托となす淨土敎は明に普佛の義に背き第一第二兩階の別機にこそ適應せめ第三階の適法ならずとは三階師が淨土敎家に加へし誹難となす。故に群疑論第四に曰く

信行禪師言此八法(同上維摩經の)是第三階衆生往生之法、觀經等教是第二階人往生之法、今日既多是第三階衆生如何學第二階法求生淨土(淨土全書六の四九)

と。因て以て信行禪師一派は此八法を以て普法となし之を以て第三階人往生の正因と見たるを知るべし、其淨土教との論難は凡て下に至つて辨ずべし。之を要するに三階教の普佛とは觀佛經等の形像佛、外道及び佛教内の邪魔佛、正見所見の眞佛、邪見所見の應佛、普眞普正佛にして特に如來藏佛、佛性佛、當來佛、佛想佛を以て普眞普正佛となす。第一斷片首文に曰く

一乘三乘普別不同者有二種、一々乘二三乘、第一段一乘衆生者從入佛法已來唯學第三階佛普法不學第一第二兩階別佛法、恒以普攝別々而常普、何以故由畏罪小膽畏錯謬故、於僧衆生斷惡修善求善知識具足行學盡。第二段三乘衆生者從入佛法已來唯學第一第二兩階別佛法恒以別攝普々而常別、何以故由大膽不畏罪不畏錯謬故、於七法內唯遍行一行而卽得出世、未能具足行盡

と。以て普別兩佛法の相違を見兼て第三階は小膽錯謬の劣機たるが故に普眞普佛に歸依し具足行學盡の勝法に由らざるべからずとなす所以を知るべし。群疑論に信行禪師作生盲觀不別前境是聖是凡總爲聖解、普敬設要、汝(三階師)既不別是佛

是魔亦須總敬作眞佛想(淨土全書六の五三)

と傳ふるもの眞相を得たりと謂ふべし。

蓋三論は不の一字に收まり唯識は識の一字に攝せられ天台は具の一字卽ち圓の一字に盡き華嚴は頓の一字に歸すとせば三階教は實に普の一字に盡き法相の普爲乘教とは自ら別異なる普法を說き普字を藉りて華嚴天台の圓頓の義を最も率直に言明せるもの之を三階教普法の思想となす。

六　第三階の對根起行

以上に於て略第三階の佛法たる普佛の思想を叙せり、卽ち第一斷片中、明第三階空見有見顚倒邪見成就九種人對根起行出世道の一段中、七段の中、一者歸一切佛盡の五佛の何たるかを見たり。以下七段中の第二より第七までを表示して第三階當根佛法の法、僧、度、斷、修、求を略述せん。

第二歸一切法盡、1經卷法、2極重惡法、3世間法、4邪善佛法、5邪見成就衆生所歸法、6十二種正見成就衆生所歸法、7一切諸佛菩薩應說空見有見法、8普想大乘法。

第三歸一切僧盡、1剃頭著袈裟僧、2十二種顚倒邪見成就僧、3十二種正見成就僧、4一切諸佛菩薩作一切空見有見僧、5普觀僧、6普想大乘僧。

第四度。一切衆生盡、1十二種邪見成就衆生、2十二種正見成就衆生、3一切諸佛菩薩應作空見有見衆生、4普觀衆生、5普想大乘衆生、6地獄、7餓鬼、8阿修羅。

第五斷。一切惡、1不淨說法得罪如殺三千大千世界滿中衆生、2空見有見衆生雖得出家離出家法如隔十萬億三千大千世　此兩段佛藏經說、3讚毀三寶三乘長短得罪譬如殺蟲五千萬斛至滿千歲唯如一日一夜　毀三寶三乘罪等如十輪經說、4打罵出家人如出一萬億佛身血如大集經月藏分經說、5若繫縛出家人得罪滅一切三寶盡令一切賢聖諸天善神出國盡而一切惡魔惡鬼惡神惡天龍八部競入其國如薩遮尼乾子經、大集經等說、6與邪善道俗往來共住得罪喻如有人殺一切衆生命盡挑一切衆生眼目盡截一切衆生手足盡一種相似如大集月藏分經說、7八當(常沒常行惡常錯謬等)如大盤涅盤經十輪經等說、8非時僧食賢劫千佛出世永不聞法常在三塗无懺悔處如像法決疑經說、9空見有見衆生如大地土空見如涅盤經說有見如佛藏經說、10五種不救(佛不救法不救等)如摩訶衍經佛藏經如大集經涅盤經十輪經等說、11一切衆生皆作父母及六親眷屬等遍爾許時起貪瞋等一切惡與一切虛空大地等(中略)16十惡、17四重、18五逆、19誹謗正法、20毀呰賢聖、21四念處、22苦集二諦、23十二因緣惡、24七漏惡、25十想、26盜三寶財物

第六。修一切善盡、惡內善(如來藏佛性)得苦善(常乞食、忍、慈、少欲知足、禪定、多利多功德(若受

他請卽廢自業利生甚少我今乞食利生甚多等)

第七求。一切善知識盡、1文義俱不解癡羊僧、2解文不解義癡羊僧、3利根人。

全文を擧げず又細釋を略せるが故に往々にして義意の明瞭を缺く點あらんも以て普法佛敎の歸三寶、斷惡、修善、度生、求善知識の一班を知るを得べし。(未完)